# 中世日本における瀟湘八景詩歌の表象について
## ――「遠浦帰帆」を中心に――
## 要旨

台湾大学日本語文学科
修士四年
蘇文甯

中国宋代の瀟湘八景は日本や韓国に広く知られている水墨画の画題であり、詩題でもある。その漢詩作品は水墨画とともに鎌倉末期の日本に伝来してから、八景が歌題としても受容され、鎌倉末期から室町時代の歌人に好まれている。本発表は瀟湘八景における「遠浦帰帆」一景に注目する。

先行研究において中国文学の学者と美術史の学者たちが瀟湘八景全体の趣旨を検討する際に、「遠浦帰帆」の「帰帆」が取り上げられた。「帰帆」の具体的な船の帰る表象が瀟湘八景全体の趣旨である「帰家」、「帰隠」に結びついた。一方、日本の漢詩における「遠浦帰帆」に関する検討は主に風景の構成に注目した。五山の漢詩に「遠浦の帰帆」と「遠浦への帰帆」の二種類があり、また「帰帆」が客船と漁舟どちらでも取り扱われているとの指摘が見える。しかし、その中に特に「帰帆」における「帰る」の意味合いに触れることはない。そこで、日本の漢詩における多様な「遠浦帰帆」の表象が如何に形成したか、中国の「遠浦帰帆」が如何に受容され、日本の漢詩と和歌で如何に変容したのかについて考察しようと思う。

本報告は、先行研究を踏まえながら中世日本の瀟湘八景の受容と日中の「遠浦帰帆」の表象の異同を検討することを通して、中世日本における「遠浦帰帆」の変容と中世歌人が「遠浦帰帆」によって表した心境を考究するものである。